



第1章 第12回歴史文化をめぐる地域連携協議会： 「地域歴史遺産の可能性を考える」

坂江, 渉 ; 海部, 伸雄 ; 國重, 和義 ; 藤尾, 昇 ; 木村, 修二 ; 河島, 真 ;
市澤, 哲 ; 伊藤, 浄真 ; 竹見, 聖司 ; 遠州, 尋美

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 12(平成25年度事業報告書):1-18

(Issue Date)

2014-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005556>



— 第1章 —

第12回歴史文化をめぐる地域連携協議会 「地域歴史遺産の可能性を考える」

日時：2014年2月2日(日) 11:00～17:30

場所：神戸大学文学部B棟331号室

主催：神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携
センター

共催：兵庫県教育委員会

後援：淡路市教育委員会

《当日のスケジュール》

主催者挨拶

- ・内田一徳(理事副学長)
- ・藤井勝(人文学研究科長)

趣旨説明

- ・奥村弘(神戸大学地域連携推進室室長)

第Ⅰ部 活動報告・交流会

報告① 11:20～11:35

- ・海部伸雄氏(淡路市文化財保護審議会副会長)
「淡路市の歴史的資料の現状と保存・活用」

報告② 11:35～11:50

- ・國重和義氏(神戸大学近世地域史研究会会員)
「『観聞記』の研究と刊行をめぐる」

報告③ 11:50～12:05

- ・藤尾昇氏(香寺町史研究会会員)
「岩部地区の大字誌編纂について」

<質疑応答> 12:05～12:20

<昼食・交流会> 12:20～13:20

第Ⅱ部 地域歴史遺産の可能性を考える

報告① 13:20～13:40

- ・坂江渉(神戸大学大学院人文学研究科地域連携
センター研究員)
「センター事業の概略と10年以上の活動を振り返って——信頼関係の構築」

報告② 13:40～14:00

- ・木村修二(神戸大学大学院人文学研究科地域連携
センター研究員)
「地域文献資料のほりおこしと保存・活用——「摩
耶道のとおる村の歴史」編さん関連事業を中心に」

報告③ 14:00～14:20

- ・河島真(神戸大学大学院人文学研究科准教授)
「高校「地歴科」教育・教員と地域歴史遺産」

報告④ 14:20～14:40

- ・市沢哲(神戸大学大学院人文学研究科教授)
「地域のなかで大学が果たす役割——10年の活
動を振り返って」

<交流会> 14:40～15:00

コメント① 15:00～15:10

- ・伊藤浄真氏(摩耶山天上寺副貫主)
「地域から大学に期待するもの」

コメント② 15:10～15:30

- ・竹見聖司氏(篠山市政策部企画課篠山に住もう
帰ろう室室長)
「大学と連携した地域歴史資産の活用とまちづ
くりの可能性」

コメント③ 15:30～16:00

- ・遠州尋美氏(大阪経済大学地域活性化支援セン
ター長・経済学部教授)
「地域に伝えられる伝承をいかに受け止めるの
か——“津波てんでんこ”をめぐる」

総合討論 16:05～17:15

はじめに

人文学研究科地域連携センターでは、各年度末に、1年間の活動を集約する意味をこめ、県内の自治体職員・市民団体代表者・大学関係者を集め、歴史遺産の保存・活用について議論する連携協議会(コンファレンス)を開催している。12回目となる今年度は、「地域歴史遺産の可能性を考える」というテーマで開催した。

現在、さまざまな分野で、大学と地域社会との関係が希薄になり、大学で蓄積されてきた知的資

源や学術的な専門性が社会からの要請に応えられていないという指摘がされている。そうした指摘があるなか、人文学研究科地域連携センターは、この12年間、大学と地域社会とを結ぶべく、さまざまな試行錯誤と努力を重ねてきた。それを通じてみてきた点の一つは、歴史資料の分析によって得られた学術的成果や知識を、専門領域だけに閉じ込めることなく、地域社会の人々がもつ知的欲求や関心に結びつけ、両者間のコミュニケーションを豊かにすることの重要性である。

歴史資料を通じた大学と地域社会の結び方は単純ではない。自治体や地域リーダーのはたす役割の有無などによって多様な形をとるが、そのなかには共通する成果と課題があるように思われる。こうした点をセンターでは、2013年7月に刊行された『「地域歴史遺産」の可能性』（岩田書院）にまとめた。この本の内容は、多岐にわたっているが、歴史遺産を活かしたまちづくり事業を前進させるためには、これに対して関係者から、さまざまな意見を賜るとともに、なによりも相互に課題を共有し、議論することが大切だと考える。

そこで、今年度の協議会のテーマを、「地域歴史遺産の可能性を考える」とした。地域歴史遺産というものが、どのような広がりをもち、それをめぐる人々の関係や、それを支える環境の構築がどうあるべきかなどについて、活発な議論をしたいと企図した。第Ⅰ部は、近年新たな成果をあげている諸団体の活動報告を通して、関係者同士の交流と相互議論を深める場とした。また第Ⅱ部は、これまでの大学の取り組みについて報告し、その成果や課題について関係者から意見をいただき、今後の地域歴史遺産の保全・活用の意義やその可能性について論じる場とした。

なお毎年開いている地域連携協議会は、地域歴史文化に関わる方々の相互交流の場としても位置づけている。今年度も協議会の間に時間を取り、各団体の方々が交流できるコーナーやポスターセッションの場を設け、参加者同士の親睦と交流を深めることができた。

以下、当日の報告内容については、それぞれの

報告者による要旨原稿を掲げ、また総合討論については、発言内容の要旨をまとめた。当時配付された図版データ等は本書には載せていない。詳細は神戸大学学術成果レポジトリ<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/>を参照していただきたい。

当日の参加者は58機関96名にのぼり、討論は1時間以上にわたり活発におこなわれた。回収した当日参加者の感想としては、「たいへん参考になる会だった」（郷土史団体関係者）、「地域連携センターが、着実に実績を積み上げている様子をうかがえる会だった」（資料館館長）、「専門的知性と市民的知性の歩み寄り、あるいは両者の信頼関係の構築の話がたいへん興味深かった」（博物館職員）、「地域連携の一環として、是非とも多くの学生さんに現地入りしてほしい」（まちづくり関係者）などの声や要望があった。

総合司会は、人文学研究科地域連携センター副センター長の奥村弘と、同研究院の村井良介がつとめた（以下、敬称略）。（文責・坂江渉）

第Ⅰ部 報告①

淡路市の歴史的史資料の現状と保存・活用

海部 伸雄氏

（淡路市文化財保護審議会副会長）

1 歴史的史資料の現状

① 旧町での現状

淡路市は2005年に5町が合併して誕生した。市の指定文化財については台帳も整備され管理もされているが、それ以外の文化財については十分な管理が行き届いているとは言い難い。旧5町が、文書史料、民俗資料などをそれぞれのやり方で様々な場所に「保管」しているので、市全体の現状を総括的に把握できていなかった。

ここ2年は市が所蔵している古文書類の所在確認と目録整理に力を入れてきた。神戸大学地域連携センターには古文書の燻蒸方法について指導・援助をしていただいた。目録作成と燻蒸を同時に進めることができるようになり、整理と保管の流れ

ができたのが大きな進歩である。

②その他の史資料の現状

淡路市も少子化が進み小学校に統合の波が押し寄せている。学校には明治以降の戦争・震災資料をはじめとして、意外な歴史的資料が残されていることがある。ところが、閉校によってこれらの歴史的資料が廃棄されたり、所在が分からなくなったりすることがある。閉校するしないに関わらず学校内の歴史的資料の所在調査をする必要がある。

阪神・淡路大震災から19年経過した。まとまった当時の震災資料は北淡震災記念公園内のセミナーハウスで保管しているが、目録ができていないので利用できない。また、小中学校や旧町役場などにも資料が残っている。台風などの災害資料も含めて、総合的に保存・活用するための対策が必要である。

2 歴史的史資料の活用

①「淡路島地震」と地域歴史遺産

2013年4月13日の震度6弱の地震によって、淡路市江井地区住吉神社の常夜燈の一部が崩落し撤去の危機に瀕した。江戸時代後期に九州方面との交易で栄えた江井地区にとって、九州や中四国の取引先商人から寄進され、その地区と商人名が刻まれた常夜燈は当時をしのばせる貴重な文化遺産だった。地域住民の話し合いで復元・保存がされることになった。2012年度市民学習講座「今に残る淡路市の石造品全4回」に江井地区の住民が参加し、地震で被害を受けた常夜燈についても学んだ経験が、常夜燈の復元保存に結び付いたと聞かされ、地域の文化遺産を生かしながらの学習機会の提供の大切さを改めて感じた。

② 淡路市域の歴史的特色に視点を置いた市民学習企画

淡路島の人々は何らかの形で海とつながって暮らしてきた。「海とのつながり」という視点から淡路市の歴史像を市民に提示してみる、という試みを2012年から行ってきた。2013年度は、北淡歴史民俗資料館の企画展「古文書から見える淡路『湊の歴史』」を開催した。江戸時代に廻船業で栄え

た淡路市域の湊の歴史を古文書を中心に展示しようとしたのである。準備の過程で江戸時代に九州方面との交易で活躍した廻船問屋の古文書と廻船道具が発見され、具体的で親しみのある企画展になった。

新たに発見された廻船問屋のある地域からは、是非地域の公民館で出前展をしてほしいとの要望が上がり、その地域を校区にもつ小学生と住民を念頭に出前企画展とミニ講演会を行った。地域の歴史を見直す良い機会になったと好評だった。

3 おわりに

「地域歴史遺産はあらかじめ『ある』ものではなく、人々が大事に思い、守り、継承していくことによって、地域歴史遺産に『なる』ものである。」(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編「地域歴史遺産保全活用ハンドブック 兵庫県版」といわれる。地域の歴史的史資料が地域歴史遺産に「なる」ための環境整備やお手伝いを、市民とともに工夫しながら進めていくことが大切であり、そのことが住みやすい豊かな地域づくりにつながると考えている。

第I部 報告②

『観聞記』の研究と刊行をめぐって

國重 和義氏

(神戸大学近世地域史研究会)

私どもの参加する神戸大学近世地域史研究会のはじまりは、平成18年3月、ちょうど『播磨新宮町史』が完成したのちのことだった。

いざ参加してみると、一般的な古文書を読む会のイメージとはやや異なっていた。時代背景や意味内容を詳しく調べ、発表するのである。参加者の議論は尽きず、その面白さに皆が魅了されてしまった。一言でいえば、「アカデミック」ということであり、久しく接することがなかった素晴らしい指導者と仲間達との出会いであった。以来今日まで、たつの市新宮町から神戸大学に通い初めて約8年が経過した。

研究会の活動状況と、研究成果の刊行の方法、それに私の所見を少し述べて、皆様のさらなるご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

1 アカデミズムという大学の研究の場の魅力

大学での研究ということは想像以上の効力を発揮する。通常、疑問点があれば「保留とかパス」となりがちだが、ここでは疑問点があってもそういう事態がほとんどなく、ここへ来れば、たいていのことは解明できるという信頼感がある。

こうしたことが実現されるのは、参加者が、なんらかの形で、地元の古文書研究会に参加経験し、古文書特有の問題点を充分認識された上で、翻刻上の無駄な議論をできるだけ避けようとする知恵が働くのだと思う。

2 大学の翻刻ルールが適用される

ここでは、凡例で大学の翻刻ルール(『播磨新宮町史』編纂時の翻刻ルール)を共通の言葉とし、翻刻が推し進められている。それはどの語を使用するか議論より、内容の検討へ研究会参加者の力を向けられるということである。この大学の翻刻ルールは、大衆化を目指した大学特有のもので、さらに整備一般化されることが望まれるし、大学内でも議論を進めてほしい。

3 地方誌史であるテキストを全国史の中で読み進めていること

私の所属する地方史(地域の歴史資料)を読むということで参加したが、参加者の多数を占める、京阪神の参加者がどのように読まれるかに大変興味があった。ここでは参加者は全国史として読んでいる。それでも、私も含めた地元の者が参加することで、たとえば、「ハチの子」のように、京阪神の方の思いつくものとは違う意味を評釈できるという面もある。このようなことから、今後どのようなテキストを選択するかは大変重要な課題だと考えている。

4 『観聞記』の翻刻進捗状況

『観聞記』(全253頁)を3巻に分け、第1巻は関係者のご助力により、出版刊行にこぎつけることができた。現在、第2巻(71~170頁)の翻刻が完了し、注釈と校正が進められている。

5 出版費用をどう分担するか

第1巻については、地域連携センターからの補助で出版、無償配布をしている。第2巻、第3巻について、費用をどのように負担するのか、現在研究会の参加者でアンケートをとったり、議論をしたりしている。

6 今後の方針として論文発表する機会をさらに増やす

第1巻で若干の論文が発表されたが、第2巻、第3巻ではもう少し多くの論文を掲載してはどうかと考えている。そのため、第2巻には索引をつけ、引用の便宜を図り利用しやすい『観聞記』に仕上げる予定である。将来『観聞記』3巻を合本し、大学の翻刻ルールを明記し、絵入り、写真入りに特装して、販売という形式はどうかと夢見ている。

第I部 報告③

岩部地区の大字誌編纂について

藤尾 昇氏
(香寺町史研究会会員)

香寺町岩部のあゆみ

① 香寺町プロフィール

- ・香寺町 神崎郡香呂村と中寺村が昭和29年4月1日合併し香寺町発足
合併時：面積31.52 k m²／人口9,632人
- ・姫路市香寺町 平成18年3月27日姫路市に合併
平成25年12月31日現在：面積31.52 k m²／人口19,269人／世帯数7,339戸
- ・岩部 平成25年12月31日現在：面積31.52 k m²／人口526人／世帯数185戸

② いくはべのさと 岩部 ——地名の由来

播磨風土記によると、6~7世紀の頃から 姫路市香寺町域は、的部里(いくはべのさと)と呼ばれていた。そして、的部と呼ばれる人々が居住し、倭政権の有力豪族に当たる的臣(いくはのおみ)氏が支配管掌していた。また、的臣氏は蘇我氏と同族関係にあると主張し、朝鮮との外交に携わったり、王宮の警護にも当たった。その関係で的部の

人たちは早くから飛鳥地方と行き来し、高い文化に触れていた。

的部里の“いくはべ”の4音がイキュワベ→イユワベ→イワベと3音に約訛し、岩部の漢字を充てるようになったもので、岩部は“的部の里”の遺称地として知られている。

岩部自治会に残る元文2年(1737)の古文書「岩部明細帳」以後のものは全て“岩部”記されていることから“岩部”と呼ぶようになったのは江戸時代の前期と推定される。

1 町史編纂から大字誌へ

香寺町では、平成9年度に香寺町史編纂の話がまとまり、平成10年4月に町史編集室が中寺小学校内に設置された。そして、香寺町内各地区より編集協力者が選出され、大槻先生を室長として迎えて町史編集事業が開始され『村の記憶』の編纂となった。

岩部では、その中で古文書や観音堂所蔵の諸書物、石造物等の調査を行ったりして、江戸時代以降の事象が大分判明した。また、町史編纂中、同時期に実施していた“集落整備に伴う土地改良事業”の中で縄文・弥生時代の遺跡が発掘され岩部遺跡群として紹介された。これらのことから、岩部には古代から人が住みついていたことが判り“いくはべの里”の遺称地でもあることも裏付けられた。それらを『村の記憶・地域編』に記載することが出来、平成23年『村の歴史』発刊で町史の刊行は終わった。

そんな頃、町史編集室大槻室長より大字誌編纂の話が出ると共に、中寺小学校の先生や児童からは再三史蹟、史実についての問い合わせ、説明依頼を受けた。改めて集落整備事業により変わり行く岩部の現状を見ると、有史以来脈々と続いてきた“いくはべの里”の歴史を、昔の世代を知る古老たちのおられる間に、残したいとかがえるようになり大字誌編纂に踏みきった。

2 編纂の基本条項

1. 岩部大字誌の発行者は、自治会とし諸費用は岩部自治会が負担する。
2. 編集委員の構成は、自治会役員より3名、香寺

町歴史研究会岩部地区の前会員より3名の計6名が担当し、香寺町史研究室 大槻室長の指導を受ける。

3. 製本の大きさは、B5判で、文字書体は明朝体、縦書き2段組とする。

文字大きさ：タイトルは14及び12ポイント、文章は11ポイント

4. 発行部数 250部

5. 予算 @1,800*250 ￥450,000-

6. 編集の内容 別途目次どおり

大字誌タイトル“いくはべの里 岩部”

7. 編集の原稿は、既刊行物(香寺町史編集室発行『村の歴史』『村の記憶』を始め、岩部地区に関連記述のある書物)の記事については、それを引用し、記事・記載の無い項目は編集委員が記事の収集や執筆をする。

8. 表紙図案は、兵庫県立香寺高校美術部に依頼する。

9. 大字誌の完成目標は、平成25年3月31日とする。

10. 編集会議 完成日を守るため、月1回以上の編集会議を開き編集をする。

3 大字誌発刊経過

- 23.12.7 有志により第1回編集者会議開催、大字誌発刊を決め自治会役員会に申し出る。

- 23.12~24.4 原稿の収集／町史編集室発行の『村の記憶』『村の歴史』などへ投稿した岩部関連分の収録(岩部の香寺町史編集協力員による)

- 24.4.29 岩部大字誌編集委員の選出と第3回編集委員会の開催／自治会より藤尾茂義自治会長・藤尾美正副自治会長・藤尾友広協議員、町史編集協力員より藤原俊昭・藤尾勇・藤尾昇の各氏計6名で構成し、委員長・藤原俊昭、副委員長・藤尾昇が担当する。

- 24.4~24.8 資料の収集、表紙と本文中のイラスト画を県立香寺高校美術部へ依頼

- 24.9~24.10 資料のまとめ、冊子印刷様式の決定、目次の決定、原稿はUSBメモリーで印刷業者へ渡すことにし、入力を始める。

- 24.1~25.1 パソコンへの入力

- 25.1~25.2 パソコンへの入力とUSBメモリー

入力分より印刷業者渡し→校正／編集会議で
収録順位のあり方、文章表現の仕方に誤りは
無いか等の検討

25.2～25.6 総合的表現方法の検討

試印刷→校(完成原稿作成)

25.7.6 印刷→校正→校正後印刷→再校正

25.8.30 印刷→三校正→印刷

25.9.14 本印刷→確認→製本→完成確認→各戸配布

4 いくはべの里 岩部 ——収録製本目次

発刊に際して

はじめに、ふるさとに誇りと愛着を

第1章 岩部のはじまり

第2章 江戸時代の岩部

第3章 神様と仏様

第4章 農業と水利

第5章 公共施設と共有財産

第6章 民俗行事

第7章 学校と子供の遊び

補 綴 (こころへんの方言集／編集関係
／あとがき／年表)

5 記載例「江戸時代の生活」

馬橋と渡し場

岩部に馬橋と言う約5,000㎡の小さな面積の小
字がある。この馬橋は、姫路方面から但馬方面に
通じる但馬(生野)街道筋で、そこから東へ400m
行くと市川が流れており、神東・北条方面に通じ
る「岩部の渡し場」へ出る。また、西へ向かうと
土師・中寺から前之庄、山崎方面に至る。

このように、馬橋は東西・南北の幹線道路が交
差する、交通の要衝であった。

岩部区長所に保存されている明和5年(1768)の
岩部村横渡しの由来によれば、享保の中頃(1730
年頃)横渡し舟の許可申請を行っている。

区長所の古文書の中に「遠近村々より東西へ往
来する諸人、又は旅人、牛馬にいたるまで舟にて
越え仕り、云々」とあり、人のみでなく牛や馬も
運び、船の大きさは5間あったと記されている。

また、寛政4年(1782)に始まる溝口西念寺での
無縁法要の中に馬子の話がある。それは、西念
寺蔵「永代経会詞堂講帳」の中に、馬橋付近で福

田(現福崎町)の馬子が某家の家臣に無礼討ちされ
た事が記され、当時の童が小唄に「福田、山崎か
けよった。馬子衆、南条なわたの露となる。」と歌っ
た。このようなことから但馬街道には人馬の往来
がかなりあった。

明治に入ってから、馬車道(生野鉦山～飾磨港)
の整備とこれに伴う明治8年(1894)生野橋の架
橋、但馬街道8年(1894)生野橋の架橋、明治27年
(1894)には、播但線の開通で人も貨物も鉄道を利用
するようになった。また、市川には生野橋に次
いで、明治30年(1897)には神崎橋の架橋され、渡
し舟の利用は段々と少なくなり、交通施設の進歩
と共に約170年繁栄が続いた馬橋及び渡し場付近
は次第に衰退して行った。

6 振り返って

① 岩部大字誌編纂にあたって、香寺町史編集協
力員に選んで頂き、何年もかかって調べて記録
し『村の記憶』、『村の歴史』等に投稿していたこ
とや町史研究室の大槻室長を始め皆さんの協力が
あって、今回1年9ヵ月の短期間で完成出来た。

② 町史編集に当たっては、遺跡・史蹟・古文書
などルーツを訪ねたり古老たちの知識や経験をお
聞きしたりと町内は言うに及ばず、県外まで訪ね
た事もあり、今は無き故人となった古老たちと共
に懐かしく思い出される。

1. 船津町仁色で“右いゆわべ”と書かれた道
標を見つけたときの感動
2. 藤尾のルーツを訪ね 香川県まで足を伸ば
し岩部神社を見つけたこと
3. 伏見稻荷で吉岡稻荷講本宮を山頂に訪ね、
登山入口の藤尾神社を見た時
4. 大峰山の行者講に参加し女人禁制の山道を
歩いた思い出、これらの記録が不十分で今回
の編集に反映出来なかった。

③ 原稿の収集は前記のように町史編集室の協力
で助かったが、編集作業には苦労した。原稿を集
めることに集中して、本としてまとめることの難
しさを知らなかった。改めて準備不足を痛感した。

④ パソコンへの入力にも時間を要した。原稿を
各々が別個に入力していたため、本としてまとめ

ようとしたとき一貫性に欠け、その修正に時間を要した。パソコン入力→印刷→校正→パソコン入力→印刷の繰り返しで簡単には出来ず。

⑤ 刊行後の反応

1. よく調べている、感心して興味深く読ませて貰った。
2. 編集にかかる苦労も読み取れる。
3. ご苦労さんでしたと声をかけられた時は、編集の苦労も吹き飛ばし思いがした。

⑥ 反省点

もう少し早く出したかった。もう10年早く。そうすればこんな事があった、こんな事をしていた、と言っている事が文字に出来たように思う。例えば、農作業を始めとする日常生活、お講（行者講、観音講、だるま講、稻荷講等）や各種の集まり、冠婚葬祭、など。

7 今まで行って来たことと今後の取り組み

① 平成24年2月4日

岩部横渡し記念碑建立除幕式

② 平成24年12月8日

岩部に残る遺跡、史蹟、石造物の見学説明会

③ 平成25年2月13日

香寺歴史研究会にて岩部大字誌編纂途中の経過報告

④ 平成25年12月8日

中寺校区地域夢プラン
スタンプラリー、岩部史跡巡り

⑤ 平成25年3月29日・30日

「いくはべの里 岩部」刊行記念
岩部資料展示会開催の予定

第Ⅱ部 報告 ①

センター事業の概略と10年以上の活動を振り返って——信頼関係の構築

坂江 渉
(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター)

報告では、12年間におよぶ地域連携センターの事業概略を紹介した上で、事業全体を通じて見え

てきた点や感じ取ったことなどについて、以下の3点にわけて述べた。

1 画期としての棚原地区(丹波市春日町)での活動

報告者の活動にとって大きい意味をもつのは、旧丹波国水上郡棚原村のパワーアップ事業推進委員会との連携活動である。2006年に、地区内の区有文書の整理・解説や里山の活用を学びたいという依頼が入り、それ以来の連携活動がつづいている。活動そのものは、地域リーダーを中心に、地区内の歴史遺産を積極的に活用していく形ですすめられており、地域の歴史文化を子どもたちへ「つないで」いくことを、つねに大きな狙いとされている点に特徴がある。ここでは住民・自治体・大学の3者のバランスのとれた活動がおこなわれ、相互の信頼関係の構築されているように思われる。地域歴史遺産の活用は、地域ごとにさまざまな形態があり得るが、当事業はそのモデルの一つになるものである。

2 フィールド活動(現地入り)することの意義

本センターの事業で報告者がつねに重んじている点の一つは、兵庫県内の各地を歩き、地元の伝承や身近な生活情報をめぐる聞き取り調査をおこなう点である。これを通じて、地域社会の現状や地域生活史の一端が見えてくることがある。報告者の専門は日本古代史であるが、本年度の調査では、播磨国風土記の時代の古道復元につながる可能性のある情報を得ることができた(福崎町と加西市との連携事業)。これらの経験は、大学の研究室での研究だけでは得られない貴重な場となっている。この点で12年間の地域連携事業は、自己の研究にとっても大きな意義をもつものであった。調査を通じて得られた成果は、連携先の自治体や住民に対して還元することはいうまでもなく、研究と地域貢献が両立できることをめざし、引き続き努力したいと考える。

3 継承すべき「歴史遺産」「歴史文化」の捉え方をめぐって

現地での聞き取り調査依頼や巡見調査をおこなったとき、「歴史遺産」の捉え方をめぐり、われわれの思いと地域住民との間の「ズレ」や「溝」

を感じる場合がある。調査依頼した時、「難しいことは分からない」「歴史のことなら〇〇さんに聞くとよい」という反応に出くわすことがある。さらにはよそ者に対する一種の警戒感、たとえば「大学の人間は信用できん」「お見せできる古文書など無い」などと言われることもあった。こんな時重要になるのは、地元自治体関係者との共同活動である。各市町の担当者の同席（同伴）のもと、調査活動のねらいや、歴史遺産（とくに生活に密着した身近なもの）の掘り起こしと、その継承の意義を語ると、必ず理解を得られる。地域連携にとって、もっとも重んじられる点は、「住民」「自治体」「大学」の3者の信頼関係の構築だと考える。

おわりに

兵庫県内各地の歴史遺産を取り巻く状況はとて厳しく、これまで永く保管されてきた歴史資料、地域行事や伝承などが永遠に失われる危機にさらされている事実を実感する。しかしこの間の個別の「成功事例」からみて、まだまだ可能性は残されている。官学民の3者が各地で信頼関係を構築し、積極的に歴史遺産を守り継承させて行く活動を試みる必要がある。

第Ⅱ部 報告②

地域文献資料のほりおこしと保存・活用 ——「摩耶道のとおる村の歴史」編さん 関連事業を中心に

木村 修二

（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）

神戸市灘区と神戸大学との連携は、2004年12月に締結された灘区の地域社会の活性化を目指して結ばれた連携協定に基づいて進められてきており、具体的には2005年度から始まった「神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成」という公募型の助成事業に、人文学研究科地域連携センター（以下「当センター」）も応募するかたちで連携事業に関わってきた。この事業助成で、当センターは初年度の2005年度に「篠原地区の昔と今」、

2006年度に「水道筋地域のむかし」と題した企画で応募し、それぞれ採択されたが、5年ぶりとなる2011年度に採択されたのが「摩耶道のとおる村の歴史」に関する事業である。

この「摩耶道のとおる村の歴史」とは、将来的に発行を計画している冊子の仮題であり、2011年度と12年度の2年間で調査を進め、講演会などを開催しながら、摩耶山や麓の村々についての歴史に関する小冊子を作る計画だった（諸事情により現時点では冊子発行の見込みはたっていない）。

この事業の中で進めてきた調査に関しては、摩耶山の麓の旧家の文書群を調査することができ、近世文書を中心に多くの発見があったが、なにより摩耶山天上寺の多大なご協力をいただき、さまざまな資料の調査を進めることができた。

こうした成果について、単年度の成果公表の場として、年度末に講演会を開催した。2011年度は天上寺での講演と摩耶山上周辺のフィールドワークを行い、2012年度には、山麓の岩屋地区で、岩屋青年会の協力を得て講演会と、摩耶山への登山アプローチだった摩耶道という古道を辿るフィールドワークを行った。

このように「神戸大学・灘区チャレンジ事業」での企画は、調査を行ってその成果を発信するという、いいかえれば資料の掘り起こしから活用までの一連の流れを期間限定で行うというものだったわけだが、報告者は2002年度の当センターの発足以来、「神戸を中心とする文献資料所在確認調査」という事業を担当してきており、神戸市域に所在情報のあった古文書の現存確認調査をおこない、さらに文書群によっては本格的な調査や整理を進め、その成果の公表を目指してきた。「神戸大学・灘区チャレンジ事業」はそうした成果の発信の場としては、1年間という期間の短さがネックに感じることはあったが、いちおうは確実にゴールを決めることができるという点でまことにありがたい機会だった。

ところで、『「地域歴史遺産」の可能性』という本の中で、私は「地域文献資料の活用」という拙文を書いたが、地域文献史料は、「保存」ととも

にしっかり「活用」をしていくことが重要であり、「保存」のためにもそれが有効であるという趣旨のことを書いた。

旧家の蔵に人知れず眠っている古文書が虫に食われているということは古文書調査をしているとよく目にするが、ここでは、たとえば地域の博物館や資料館などに収蔵されているものも含め、地域文献史料というものは、なんらかの形で活用を図らないと、肝心の「保存」への基盤も揺らぐことになるのではないかと。

もちろん博物館や資料館といった機関では、唯一無二の貴重なものであるそうした古文書のような資料の「保存」が重要なことは十分に認識しているだろうし、無人の家のメタファーと博物館の古文書を必ずしも一緒にはできないが、「活用」が充分にはかられず死蔵状態に陥っている地域文献資料が多いこともまた事実である。

古文書というものに対する一般的な認識は、絶対量の多さや、文字が判読できないがために内容的に理解が困難な点、あるいは見た目に不潔に見えることからそれが貴重な文化財である認識が、仏像とか絵画とかいったような文化財とくらべて相対的に低くなっていると思われる。しかのみならず地域の過疎化や高齢化がすすみ、文化財維持の担い手としてのコミュニティや家族が喪失しているという社会的な現状もある。さらに、大規模な災害や、「構造改革」「行政のスリム化」といった政策により、安全と思われた文化財保存施設ですらも危機を迎えている。

そんな状況下にあっても、困難な道だとはわかっていても、地域社会の中で地域住民自身がこうした地域遺産としての古文書などの文化財の保存を模索していくことも場合によっては必要なのではないか。見方をかえれば、これから何らかの「活用」のしかけによって、地域社会の一般の方々と、「保存」すべき地域文献史料との精神的な距離を縮めることが必要なのではないだろうか。

私は古文書のような地域歴史遺産には、地域歴史遺産そのものへの認識と理解へ向けた取り組み

や仕掛けを企図した「活用」という位相と、「消滅」という事態から古文書のような文化財を遠ざける努力としての「保存」という位相とを両極とする一種の循環関係があると考えている。保存のためには活用が大事、活用のためには保存が大事ということである。

その循環の中心軸に地域社会の住民の方々がいるのが理想であり、それが非常に重荷であることも明らかなが、地域の自治体や私たち大学の存在が加わって三者が三角形を形成する三位一体の関係で取り組むのがやはり効果的なのだとおもう。

第Ⅱ部 報告③

高校「地歴科」教育・教員と地域歴史遺産

河島 真

(神戸大学大学院人文学研究科)

地域歴史遺産の保全・活用の主体となるのは、言うまでもなく地域である。これまで大学は、これを支援するとともに保全・活用の理論的研究を行ってきた。しかし、ある程度の専門性をもって、地域の中でそれを担う主体の登場がいま求められている。高校の地歴科教員がその役割を果たせないかというのが、本論の趣旨である。

地歴科(以前は社会科)教員は、地理学・歴史学の方法を学生時代に学んでおり、過去には考古学・民俗学・文献史学等の担い手として活躍した教員も少なくなかった。しかし今では、教科指導だけでなく、生徒指導、課外活動(クラブ活動)指導、会議、書類作成、それに保護者対応などに追われ、教員は総じて多忙をきわめている。また、進学実績による学校評価・教員評価が、教員の関心を進学のための教科指導に向かわせていることも否めない。学校教育の場を離れて、社会教育のための活動に従事する余裕もきっかけも失われているのが現状である。

しかし地域では、例えば古文書(古地図)が読める、史料の取り扱い方を熟知している、フィールドワークの経験がある、あるいは学問としての歴

史学・地理学へのアクセス回路を持っているといった、専門家の果たす役割が期待されている。同時に、地域歴史遺産の保全・活用を担う、次の世代を育成することも課題となっている。高校の地歴科教員は、こうした期待にこたえ得る存在である。

実は、地域歴史遺産は、地歴科教育を豊かたらしめる格好の素材でもある。例えば、高校「日本史」の教科書は、北海道(蝦夷)や沖縄(琉球)の扱い方に見られるように、現代日本の視角からその生成過程を略述したもので、そこでは地域の歴史(地域の個性)はほとんど顧慮されていない。しかし、前近代は言うまでもなく、法とシステムの網の目にからめ取られているように見える近代・現代においてさえ、地域(北海道、沖縄のみならず)は個性を持って存在しているのであり、地域と国家とを複眼的に見据えることによって、歴史認識は豊かになり、国家の歴史をも具体性をもって理解させることが可能になる。地歴科の教科指導にとっても、地域歴史遺産は大きな意味を持つのである。

とはいえ、多忙な高校地歴科教員に、ボランティアとしてそうした役割を担わせるのは確かに難しい。だとすれば、地域歴史遺産とのかかわりを地歴科教員の役割として位置づけ、それをサポートする体制作りを行う必要がある。例えば、社会教育を主務とする自治体の部門と高校との連携、高校教員のスキルアップのための研修時間の保証、高校の地歴科の授業で活用できる地域教材(新しいタイプの自治体史)の編纂などが当面の課題となろう。さらに、そうした教員の活動が正当に評価されるシステムの構築も不可欠である。

地域の中で地域歴史遺産の保全・活用を担うとともに、次世代の担い手を育成するという課題の必要を思えば、専門家としての高校地歴科教員の役割は重要である。今後の地域連携のひとつの課題として、大学としても位置づけておく必要があるだろう。

参考：河島真「地域歴史遺産の保全・活用における中学・高校教員の役割」『地域歴史遺産の可能性』岩田書院、2013年。

第Ⅱ部 報告④

地域のなかで大学が果たす役割 ——10年の活動を振り返って

市澤 哲
(神戸大学大学院人文学研究科)

1 活動が始まったころに考えたこと——富松の活動から

地域連携センター発足時の尼崎市の富松地区での町作り活動のなかで、立場や得意技のちがう人々(自治体、住民、大学)の協業が持つ可能性に気づかされました。以後、私の中では、これが地域連携活動の「基本型」となりました。しかし、その一方で、協業の結果、どのような地域の歴史像が提示されたかについては、十分に意識が向いていませんでした。厳しく言えば、住民、自治体、大学がそれぞれの関心や方法にもとづいて作ったコンテンツを並列した(そのこと自体、画期的だったとは思いますが)にすぎず、協働の中で、何か新しい地域の歴史像が生まれたわけではありませんでした。

2 人材育成へ——大学の関わり方の探求

その後、文部科学省のプロジェクトに申請する中で、地域連携活動を支える人材を育成する活動が始まります。人材育成の第一は、地域連携活動を地域の側から支える人材の育成です。このような人材の有無が、地域連携活動の成否を分かつ重要な要因になることは、センターの活動経験から明らかでした。ただ、問題点もあります。地域の歴史に対する関心の持ち方は多様であって、大学が「かくあるべし」という枠を提示することが、はたして地域の歴史に対する関心を持つ人を増やしていくことになるのだろうか、という疑問です。これと関連して、「人材育成」という語感には、大学が「お墨付き」を与えるというイメージがつきまといまいます。私は、地域連携活動は、大学が「お墨付き」を与えるという構造を根本から見なすことを含意していると思っています。そのような考えからすれば、人材育成は諸刃の剣であるといえます。

人材育成の第二は、学生、大学院生を、地域の歴史文化の担い手として教育することです。第二の人材育成について考える中で気がついたのは、参加型開発という考え方にある、「よそ者」が「当事者」になることの重要性です。考えてみれば、学生も私たちも、多くは「よそ者」として暮らしています。そういう「よそ者」がどうやって「当事者」になっていくのか、「よそ者」を受け入れる仕組みをどうやって作っていくのが問題になりました。「よそ者」が「当事者」になれるのか、という疑問があるかと思いますが、大胆に言えば、「よそ者とは、ある当事者の謂」です。学生教育については、地域の歴史遺産の重要性などが「お題目」化し、レポートでそれが繰り返される傾向にあることが気になります。地域の問題を歴史遺産に限らず、自分の問題として考えなければ、地域連携活動の意味や限界、課題も、内在化されません。センター発刊の『Link』には、一見歴史文化と関わりの薄そうな領域の方に、積極的に執筆依頼していますが、今後も地域連携運動を考える地平を、伸びやかなものにしていきたいと思います。

3 大学の役割とは何なのか？ ―歴史学の来歴

最後に、「地域の歴史は誰のものか」という問題を提起したいと思います。冒頭でも述べたように、地域の歴史像は立場や個人の関心によって多様です。それらは棲み分けたままでよいのか、すりあわせてみるべきなのでしょうか。近代日本史学が成立して以来、アカデミズム史学は、実証にとって「あやしげ」な部分を次々に脱ぎ捨ててきました。その衣の中から、地域の歴史を自分たちで考えようとする人々や、史料を無視して自身の願望を歴史に託する人々があらわれてきたような気がします。アカデミズム史学は、脱ぎ捨ててきた衣との対話の席に着くべき時が来たのではないのでしょうか。

コメント①

地域から大学に期待するもの

伊藤 浄真氏
(摩耶山天上寺)

摩耶山天上寺副貫主の伊藤浄真と申します。摩耶山観光文化協会の代表幹事でもございます。今でこそ文化施設等が整備が整いまして、お寺とかお宮とかが今は、何をすべきかということを考えています。昔はお寺は公民館とか寺子屋とかという役割を担って、いろいろな人がそこに関わっていたわけですが、そういった役割はどんどん失われていきました。その中で天上寺は次のような役割を軸として活動をしています。それは信仰のより所、伽藍や絵画、植物や動物など自然を含む文化の継承者、歴史を重んじつつ地域に根ざす主体であるという、この三つです。

その中で、摩耶詣祭という祭りの再興を行いました。旧暦の二月初午に近隣の農家が飼馬、その年生まれた仔馬を寺につれてくるという行事が室町時代から行われていました。江戸時代に最盛期を迎え、春の季語にも摩耶詣というのがあります。戦前までは盛んに行われていたようですが、戦後廃れてしまいました。

それを今は六甲山牧場の馬を借りて摩耶詣を行っております。摩耶山で、摩耶毘布を蔵につけて、末永く長寿であることを祈ります。また花簪を土産に買って帰ったという、そういう行事を再興しました。飼馬は農耕を代表する存在で、摩耶詣とは、共同体そのものの発展を祈ったものでした。毘布を持って帰るということがありましたが、北前船が、沖を通るとき、摩耶山に海産物を奉納します。その中で毘布は縁起がいいものであるということから、参詣人にお裾分けをしたことに端を発するというように聞いております。ようやく最近摩耶詣が定着してきたところでございます。

もう一つ、摩耶古道の復活ということを行っております。村や道や山というのは時代によって名称がかわります。また、複数の川、道が六甲山系

には存在しています。摩耶古道の復活とは、その時代にその道が果たした役割を時代と重層的に重ね合わせて紹介していこう、そして、その道を実際歩いてその時代のよすがを感じようという、そういう試みでございます。

文献史料で事実を確認することはまず大前提ですが、現地踏破(フィールドワーク)してみる、さらに、もっとロマンチックにその時代の人になってみようということで摩耶古道というものを作りました。摩耶山も最近山もきれいになりました。登山者も非常に多彩

摩耶古道にはその一環で、「六甲山(やま)の上美術館(さわるみゅーじあむ)」というのが今度出来ました。目が不自由な人でもわかる絵画や彫刻などを飾っています。ただし、こういうものは、お寺にあった銭洗弁天、とげぬき地蔵などが昔から果たしてきたものの現代版であるともいえますし、を走り回る、トレイルランニングというものがありますが、これも昔の山岳修行にルーツがあるとも言えます。

このような昔の行事の再興やその現代版の創造を通じて郷土を愛する人々を育てていこうというのが、われわれの活動の趣旨となっております。

大学との連携関係ということで申しますと、先生方のみならず、学生の方の方の協力も不可欠です。その中で一年だけでなく、在学中ずっと天上寺の試みに関わってもらうような継続的な関係を作っていきたいと思います。ありがとうございます。

コメント②

大学と連携した地域歴史資産の活用とまちづくりの可能性

竹見 聖司氏
(篠山市政策部企画課)

1 神戸大学と篠山市の地域連携

篠山市は、篠山市全体を“生きた”現場として教育・研究を行う大学の研究者・学生に、フィー

ルドや連携先の紹介、活動スペースの提供を行いながら、篠山市が抱える地域課題の解決と地域活性化を図る目的で神戸大学と地域連携協定を結んでいる。

これまでに、里山林の管理手法、獣害対策、就学前発達障害児支援などの地域課題研究、実践農学入門などの授業、農村地域における学びの場づくり(Rural Learning Network)などが展開されている。なかでも人文学研究科とは、日置地区の古文書調査と夏期合宿、図書館と連携した歴史文化遺産活用講座や古文書整理サポーター養成講座に取り組んできた。

2 創造農村のまちづくり

篠山市は、人・自然・文化が織りなす食と農の都～「篠山の時代」をつくろう～を将来像として、特徴的な地域文化を生かしながら生活の豊かさを高めていこうとしている。これまでと異なる新しい価値観の創造といえるかもしれない。

その準備として、2008年から文化財総合的把握モデル事業に着手して2010年には歴史文化基本構想としてまとめ上げた。このなかで、景観やまちづくり、建造物や町なみ、自然環境、民俗文化など調査し、春日神社の元朝能や波々伯部神社の夏祭り、丹波篠山黒大豆をはじめとした農産物、日本六古窯の丹波焼などの素材と、これまで保存に重きが置かれていた歴史文化資産の活用を重視しながら創造的なまちづくりにつなげようとした。

また、平成25年9月には「先人が残した技術や資産に新しい知恵を重ねて生業として継承していく」という創造都市推進計画も策定した。これは、自治会(村)の行事やまつりの謂れ、特産や伝統料理、景観や町なみといった技術・資産をもとに地産地消やツーリズムといった視点で工夫を凝らし、古民家レストランや着地型観光といった新しい産業を生み出していこうという計画である。そのためには、何が資産か気付く必要があるし、産業化していくにも物語性を持たさなければ価値が上がらない。そこに、地域歴史遺産が深く関わってくると考えられる。

市内では、いわゆる限界集落化した集落の空き

家を宿泊施設やフレンチレストラン改修に改修し、蕎麦懷石料理店やと連携して古民家オーベルジュとした「集落丸山」がある。人が行き交うことで活性化するとともに、耕作放棄地がなくなるなどの予想していなかった効果も現れている。また、重要伝統的建造物群保存地区の河原町では、芸術家が町屋で個展を開く「丹波篠山まちなみアートフェスティバル」が開催され、秋の一大イベントに発展している。

3 大学連携から商品開発へ

平成22年に空き家をレストランに改修しようとしたところ、蔵の中からたくさんの古文書が出てきた。その古文書調査を大学にお願いしたところ、学生さんの合宿などの連携事業につながった。そこから、この空き家が庄屋さんの建物であったこと、この地域でお茶の栽培が盛んであったことなどがわかってきた。

こうした古文書からの解析をもとに、篠山駐在の大学研究員のアイデアと改修後にオープンしたレストランのシェフの技術をコラボレーションさせて、特産の一つである丹波茶と農学部ギャバ米を使った焼菓子が試作された。この焼菓子は、市と大学の記念シンポジウムで試食され、大学連携の発展性や地域歴史遺産の活用事例として多くに人たちに認識された。

このように、地域の歴史というものをいろんな人たちが様々な視点から捉えることによって、地域の歴史遺産がまちづくりに生かされる可能性は大いにあると期待している。

コメント③

地域に伝えられる伝承をいかに受け止めるのか——“津波てんでんこ”をめぐる

遠州 尋美氏
(大阪経済大学)

1 釜石の奇跡

周知の通り、東日本大震災の被害は甚大でした。2万人近い人々が犠牲となり、家や職場を失った

人々は、原発避難者を含めれば数十万人に及びます。まもなく3年が過ぎようとしていますが、被災者と被災地の復興は思うようには進まず、まだまだ緒に就いたばかりの状況です。

しかし、その悲痛な出来事の中にあっても、私たちの心を打つ教訓に富んだ経験もありました。人口4万人の小さな都市で、1000を超える人々が巨大津波の犠牲となった釜石市。しかし、小中学校の児童生徒3000人のほぼ全員が津波を逃れ、命を守り抜いたのです。

2 釜石の奇跡を生んだ防災教育

この「釜石の奇跡」を導いたのは、釜石市をあげて取組んできた津波防災教育の成果であったことはよく知られています。スマトラ沖地震調査の経験から市民啓発に心血を注ぐことを決意した群馬大学大学院の片田敏孝教授の働きかけに応え、モデル校での実験的取組みを経て、全ての小中学校で津波防災授業に取組みはじめたのが2008年度。震災は2011年3月でしたから、2年余りで早くも試練に直面した。そして見事な結果を出したのです。

低学年の児童は既に授業を終えて帰宅していましたが、親が共働きで一人きりの子もいました。でも親の帰りを待つことなく避難しました。親や祖父母がいても避難に消極的なのは大人の方でした。子どもたちは渋る親をせき立てて避難しました。

とりわけ深刻な被害を受けたのが大槌湾に面する鵜住居地区です。地区防災センターに避難した200名を含め市内の犠牲者の半数にあたる500人が命を落としました。その鵜住居地区でも、釜石東中の子どもたちは、校庭にいたサッカー部員を先頭に、鵜住居小学校の児童の手を引き、周辺の大人たちを巻き込んで、高台の避難所まで1.6kmを逃げ延びました。子どもたちの避難行動が自分自身だけでなく大人の命をも救ったのです。

NHKが放映したドキュメンタリーで、「“奇跡”というのはおかしい。普段からやっていたことを実践した結果だから“実績”というべきだ」と胸をはる小学生の堂々とした姿は、とても印象的で

した。

3 災害対策と地域の伝承——「津波てんでんこ」と「これより下に家を建てるな」

釜石市が取組んできた防災教育の目標は誰にも頼らず自らの判断で避難行動をとることのできる主体性を育むことで、常に津波に備えて生き抜くことのできる災害文化を定着することにあります。ですから、過去の災害経験を伝える石碑などの災害遺産や世代を超えて語り継がれてきた伝承を、フィールドワークやお年寄りの話を聞く活動により学ぶことが、柱の一つとなりました。例えば「津波てんでんこ」の伝承です。まさしく、子どもたちの避難行動は「津波てんでんこ」を実践したものと言えるでしょう。この釜石の子どもたちの行動がマスコミを通じて広く知られるようになると、災害対応において先人の教えに学ぶことの重要性が喧伝されるようになりました。

「津波てんでんこ」とならんでもう一つ注目を浴びたのが、宮古市重茂姉吉地区に建つ石碑に刻まれた「これより下に家を建てるな」というメッセージです。当時の菅首相が4月1日の年度はじめの所信表明演説で「高台移転」を打ち上げたこともあって、この石碑もたびたびマスコミに取りあげられました。

4 災害経験に学ぶ災害対策

私は、災害経験の適切な継承は、災害犠牲者ゼロのまちづくりを進める上で極めて大切だと思っています。もともと災害対策は過去の災害経験に学ぶことから成り立っています。ハザードマップも、過去の災害履歴に基づくもので、歴史的な記録から確認可能な地震規模の既往最大値をもとに、揺れの強さや津波の高さを推定し、整備済みの防御施設や耐震化の程度を加味して、地域ごとの建物被害や津波の浸水高を予想し図化するという方法がとられてきました。過去の災害経験、つまり歴史に学ぶことは、改めて指摘されるまでもなく、災害対策の基本なのです。

しかし、東日本大震災のあとのマスコミの取り上げ方、つまり「先人の知恵」の喧伝の仕方にはそのまま肯定できないものがあります。

5 伝承を鵜呑みにする落とし穴

◇ 封建支配のイデオロギー色濃く反映した「いのちてんでんこ」

例えば、「津波てんでんこ」。これは津波避難の標語として1990年に提唱されて定着したので、地元の人々の言い伝えのもともとの表現は「命てんでんこ」です。親や子への思いを断ち切って自分が生き延びるために心を鬼にせよというのは、津波に限ったことではありません。飢饉など人々の存亡を脅かすあらゆる出来事に共通した教えです。なぜ、こうしたことが世代を超えて語り継がれたのか。それは、封建時代、限られた資源・技術の制約と過酷な身分制支配にがんじがらめにされたなかでは、個人よりも、家、一族の存続を、心ならずも優先せざるをえなかったのです。

歴史的事実は、単なる事実ではなく、その時々自然条件や社会的・技術的条件のもとで人々のくらしと営みを反映したものです。その本質的な意味を理解することなく、結果として残された事実を普遍的な真理と見なすわけにはいきません。「いのちてんでんこ」は封建イデオロギーを体現したものです。基本的人権が尊重されるべき現在において、「親を見捨てろ、子を見捨てろ」ということが津波に対応する最善の道であるがごとく喧伝されることは、到底首肯できるものではありません。

◇ 漁村の居住文化から眼を反らせる「これより下に家を建てるな」

重茂姉吉の石碑に刻まれた「これより下に家を建てるな」という言葉も同様です。津波の被害を繰り返し経験した人々が、海辺での居住を放棄して高所に定住の場を求め、その思いを後世に託そうとしたことは、敬意を払って受け止めるべきことであると思います。

しかし度重なる津波被災にも関わらず、あえて海辺に住居を構え集落が築かれてきたことにも、十分な理由はあります。

漁師たちは毎朝潮の香りを確かめ海の顔色を見て漁への出否を決めてきました。災害の危険があっても海とともに生きるくらしが、漁業を育み

私たちの毎日の食卓を支えてきたのです。漁村の居住空間と集落景観は、世代を重ねた漁業者のくらしを写したものです。漁業集落の形成を経済優先の乱開発と同一視することはできません。

歴史の事実は多様であって、そのいずれにも同じように敬意が払われてしかるべきでしょう。だからこそ、単なる歴史ではなく、「歴史文化」という視点が必要なのだと思います。

6 歴史文化の継承は、今を生きる人々のため、未来を築く将来世代のために

私がこの場で主張したいのは、歴史に学ぶということは、とりわけ「地域連携」という枠組のもとに歴史を位置づけるのは、今の時代に生きている人々のくらしと未来、そして今後それを受け継いでいく将来世代の営みを育む知恵を汲み取るためであって、歴史の事実を無批判に受け入れることではないということです。当然のこと言わずもなですが、マスコミの論調や復興をめぐる混乱を見ると、社会に向けてそのことを強調する必要を感じます。

7 「津波てんでんこ」の現代的意味

釜石で防災教育に取り組んだ皆さんは、そのことを正しく理解していました。「津波てんでんこ」を「親や子がかまうな。自分が助かることだけを考えろ」ということだと教えてきたものではありません。子どもたちには「大人に頼らず自分で判断して自主的に避難しよう。君たちが自分で判断して避難できるようになることで、お父さんやお母さんの命も救うことができる」と教えたのです。

◇ 家族愛を否定しても止めることができない「ピックアップ行動」

自動車のNAVI、携帯電話に組込まれたGPSのデータを追跡してみると、地震発生直後は、海岸部から内陸に向かう車が多いのに、20分過ぎから海辺に向かう車の方が多くなり、結局、浸水域に入ってしまった車の数は、浸水域から脱出した車の2倍を超えました。いわゆる「ピックアップ行動」です。親を思い子どもを思う人々の行動が犠牲者を増やす悲しい結果を招いたことは否定できません。しかし、それは愚かな行動だと非難してもそ

れを止めることはできません。

◇ 自発的避難がみんなの命を救う

その行動を止めるには、「子どもたちもお年寄りも、自分の助け無しに確実に避難している。だから自分が助けに行く必要はない」という確信を持つことができるようにする以外にありません。

だから釜石では、学校は、子どもが大人に頼らず自分の判断で逃げるができるように徹底して訓練する。家庭では普段から家族で話し合って、それぞれの家族が地震の時にはどこに逃げるのか、学校にいたなら、家にいたなら、友達と遊んでいる時にはどうするのか決めておく。一人で避難することが困難なお年寄りや障害のある人がいる時は、地域で話し合って、援護の仕組みを作っておく。そして地震と津波が収まった後にみんなが落ち合う場所を決めておく。お互いが話し合った通り確実に避難しているという信頼を築くことができたなら、働いていて居住地を離れている大人も自分の避難に専念できる。それが現代に生きる私たちの「津波てんでんこ」の意味だと捉えたのです。

8 終わりに

阪神淡路大震災のまっただ中で、およそ20年に渡って復興支援を続けてきた神戸大学において、歴史文化の専門家である諸先生方、様々な立場で地域連携に実践的に取り組んでおられる皆さんの報告を聞かせて頂き本当にありがとうございました。多様な歴史の事実のそれぞれに敬意を払いつつ、現代に生きる我々が物質的にも文化的にも豊かな毎日を送ることができるように歴史の経験をどのように生かしていくのか、これからも発信し続けて下さることを期待いたします。

総合討論

梅村伸雄 近年開発がしきりに行われており、昔の風景を知るためには写真が必要になる。しかし写真がどこにあるのかわからない。どこに行け

ば写真があるのか。写真も大事な歴史資料と思われるので、大学で管理してほしい。

山口阿佐子 先祖のことを知りたくて市役所にいったが、大正8年以前の戸籍は全部捨てたと言われた。どこにあるのか知りたい。

水原正剛 文書館で市史を編纂する際に集めた写真がある。権利の問題で使用に制限があるものがある。その関係もあり、事前にお問い合わせいただければよりスムーズにご利用いただける。戸籍関係に関しても、市史編纂の関係上収集したものがある可能性がある。

大国正美 神戸市が収集したアーカイブズがあり、長田区で公開されている。深江生活史料館でもたくさん写真を収集している。特に使用に制限はないが、地域的にはかなり深江近辺に限定されている。

坂江渉 豊中の事例でいえば、阪急の写真などを含めて市の広報課が持っていた。

梅村伸雄 神戸で開発工事をするときに、景観が大きく変わり、そのたびに重要な土木遺産が失われるが、工事した主体すら持っていない、見せてくれないという問題があり、大きな課題だと考えている。

奥村弘 写真の問題はいくつかほかにも大規模に収集しているところもあるが、もっと情報を集約する必要がある。

大国正美 淡路市の事例については、公開についてはどう考えているのか

海部伸雄 もちろん公開が必要だと考えているが、文書も緊急避難的に青少年センターにおいてあり、文書の目録が未作成のものもあって、今のところ保存で手一杯というのが現状です。

伊藤宏幸 完全に目録を作成して公開ということになると、10年ほどかかってしまうので、地域の人とともに整理するなど、価値を共有するなどの取り組みをしつつ、できるだけ早い段階で公開を進めていきたい。

奥村弘 宮城資料ネットのように、まず写真をとってもらって、写真を閲覧に供し、資料は資料で同時進行的に整理を進めるという手法をとって

いるところもある。

五月女健司 博物館などで学会やシンポジウムなどを開催するなどを観光振興として展開するという考えが最近あると思うが、今後シンポジウムの題材をまちづくりにして一過性のものにならないようにする工夫などは考えておられるか。

竹見聖司 獣害や都市創造の学会を誘致するなどの試みは行っており、シンポジウム等を行うにしても一過性のものにならない、地域にとって価値のある内容のものにしようとしている。

村井良介 まず、歴史に対する関心の持ち方の立場による違いについて、それぞれの報告者がどう考えるかをテーマとして議論を進めていきたい。

坂江渉 津波てんでんこ(「てんでばらばら」の意)の話を興味深く聞いた。歴史を後世から見るときの視点には気を付けなければならないと考えた。自分は風土記研究をしているが、その中で今はない交易・交流を見ることがあるが、篠山の再開発の話で、商品開発の経緯で九谷焼や伊万里焼が出てきたという話はその話に通じるものがあると考えた。

木村修二 東日本大震災以降、津波の記念碑など調べようという動きがみられる。これは過去の人からのメッセージを受け止めようという行動のように思うが、ただ石碑の文字は崩し字であったり、読解が難しかったり、風化が進んでいたり、ただちに意味が取れないことが多い。その意味で、私たちがそれを現代語訳するというニーズがあると考えている。歴史学の最終的な役割はそこにあるのではないかと個人的には考える。

河島真 歴史とは少なからずフィクションであるという側面がある。フィクションであるから、学者が見るか、地域の人が見るか見方によって歴史の見方が異なるのは当然であると考え。多種多様な見方からコンセンサスを得ることができるかどうかはわからない。埋めがたい溝があるかもしれない。しかし、少なくとも社会的な関係が希薄するなかで、同じテーマについてさまざまな見

方をする人が議論する土台があるということが重要であるであると考え。

市澤哲 専門家と市民とがどのように対話するかという問題は原発事故以降必要不可欠のものとして我々の前に立ちはだかっている。遠州さんのお話しをお聞きしながら、それがどのように実現されていくかということを歴史学という枠にはもはやとどまらない問題であるが、見ていきたいと考えている。「当事者」と「よそ者」という言葉については、社会学・開発経済学から借りてきた言葉であるが、「よそ者」といったときに必ずしも悪い意味を含意しているのではなく、当事者が「よそ者」に依存することで人間として、あるいは社会として自立できるという考えもできる。

山口阿佐子 戸籍は大正8年以前のものを見せないといわれたが。

松岡賢明 以前は除籍の保管期限は80年だったが、今は150年になった。しかしどこの自治体もそれに従っているわけでないので、神戸市がどうなっているか分からない。

奥村弘 日本独自の個人情報を守る大きな問題とかかわっている。例えば欧米ではそうではない。これから考えていかなければならない問題である。

松岡賢明 一番地域連携活動する上で難しいのは、活動を続けていくということにあるのではないか。地域でのパートナーは高齢者が多く、より若い世代は仕事で忙殺されているという状況で若い担い手の確保が難しいと思われる。若い世代をこれから参加させるための何らかの方策はとっているのか。

坂江渉 大学で授業科目として古文書合宿や地域歴史遺産関係の講座は開催しており、毎年50人ほどが履修している。座学の範囲でも少しは理解が深まるが、より重要なのは外に出て実際外に出ていくことである。ただ襖の下張りをはがす作業などに学生に声をかけると、何人かは毎年必ず参加がある。授業ではすぐに何かをしてほしいというのではなく、社会に出て、子供が生まれた後、子供を育てる過程で何かできることをしていくと

いうきっかけになればいいと考えている。

河島真 高等学校に大学生が行き、高校生が地域のことを調べてまとめてもらう、大学生がそれを指導するという試みをしている。

五月女健司 博物館の立場からすると、子どもしかこない。次に来るのは子どもが出来たとき、子どもを連れてくるときということになる。大学においては、大学で博物館という施設は社会に出た後にさらに知識を得ることができる施設なんだということを伝えてほしい。

寺井 正文 フィールドワークなどをするとき、もっと長い期間、たくさんの人を集めて行ってほしい。そうすればもっと連携が生まれる。

印藤昭一 私は、自治体の人間として、地域の歴史というものと、歴史学というものは分けて考える必要があると思っている。たとえば三田市の例でいうと3割はニュータウンの住民なので、われわれの街に歴史はないと考える人が多いが、しかしそのニュータウンの成り立ちそのものに街としての歴史があるというよい反応が返ってくることが多い。その意味では学術的な意味で歴史学の後継者というものを育てるのは難しいかもしれないが、地域の歴史を考える担い手を育てるという意味ではあまり心配していない。

大学については、当事者性を獲得する努力するのではなく、あくまで「よそ者」に徹してもらいたいと考えている。地域に根付いた当事者性はそう簡単に獲得できるものではない。むしろ「よそ者」というところに研究者の強みがある。

また、大学には、自治体ごとでなく、自治体を越えた枠組みをコーディネートする役割を果たしてもらいたいと考える。

河野未央 研究者が「よそ者」として地域に入っていくときに、今は大学も多く研究者が供給過多となっており、地域の側から研究者が選ばれる立場にあるのではないかと考えています。その意味では「よそ者」として「お節介」をしにいくという関係は大きく変わっている。

後継者育成でいえば、大学生では既に遅く、一番歴史に興味がある世代は小学校高学年である。

中高になると興味を失っていく。そのため小学校高学年に対して働き掛けを行っていく必要があると考えて、教育実習の機会などを捉えて、古文書に触れてもらったりという工夫が必要だと思っている。

伊藤浄真 大学などの「よそのもの」がもう少し大物の「よそのもの」であってほしいという思いがある。我々がいろいろと地域の歴史を調べたりした結果を研究者に「お墨付き」をもらいたいと考えます。一方で、歴史遺産を活かしたまちづくりの立場からすると、たとえば実際にある行事が行われていた時代の人に「なりきる」ということが重要だと考える。われわれは歴史遺産を活かしたまちづくりを、「遊び」というところに注目してやっていきたいと考えています。祭りには成長の節目、季節の節目いろいろなものが含まれており、その中に地域性も織り込まれていると考えるからです。

また自治体の影響力は非常に強いと考えており、ぜひ積極的に連携を強めていきたいと考えています。

竹見健司 歴史をみるときの多様性が重要なのではないかと考えました。印藤さんのお話しにもありましたが、まちの歴史という視点も興味深いと考えました。後継者問題では、子どもは非常に歴史は好きです。しかしある時点で急に興味を失っていくことが確かにあります。その点についてはいろいろなアプローチが必要だと考えます。

またお寺との関係でいえば、若い人はあまり宗教に興味がないといえるかもしれないが、年を重ねると段々興味ができてきた。今でも般若心教を唱えられるほど知識はないが、簡単なところから入っていくような仕組みが必要だと思う。

遠州 尋美 歴史は支配者にとって都合のよいように記述されるという側面がある。そのため歴史の事実アクセスする場合、どうしてもフィルターがかかったものしか見ることができない。歴史研究者には歴史学にはそういったバイアスがかかるということを理解した上で研究を進めてもらいたい。

奥村弘 今日は96名の参加をいただき、交流の場としては有意義だったと考える。議論の中で歴史文化について重要だと思った論点をいくつか挙げると、一つは遠州さんがおっしゃった自分で判断できる力ということ、また印藤さんがおっしゃった地域を歴史的にみるということになります。歴史文化といったときに、その内容は具体的でなければならないと思います。

自分で判断し、地域を歴史的にみるときには、地域歴史遺産が必要不可欠であると考えます。地域歴史社会からどのように地域をとらえ、どう地域を形作っていくのかということを経験歴史遺産を使って大学がどう関与していくか、これから考えなければならないと考えました。